

特集 比較文化研究

比較文化研究会について

西 川 長 夫

今回「立命館言語文化研究」で比較文化研究会の特集号を組んでいただけることになった。これは初めての試みであり、またこの研究会は誕生後まだ日が浅く、会の性格も知らない方が多いと思うので、この機会に簡単な紹介をさせていただきたい。

来るべき時代が「文化」の時代であることは、多くの人々に予感されているのではないと思う。それは国家中心、あるいは能率と生産力第一主義の「政治」や「経済」がわれわれの生活と地球環境を破壊しつつあることが誰の目にも明らかになって、地球上の新しい秩序は別の原理によって探究されなければならないことだが次第に認識されてきたからであろう。だが、それがどのような形をとるのかはまだ判然としないし、またこの問題をどのような手だてで考えてゆけばよいのかも明確でない。比較文化研究会はそんな状況のなかで、1991年の春に結成された。もっとも同名の研究会は一時期、外連協や国際関係学部の中にもあったから、ほぼ十年ほどの模索期間をへての誕生である。新しい研究会の結成にあたっては、幾度か準備の会合が開かれて、ほぼ次のような基本方針がまとめられた。

(1) 広義の文化を対象にすること。つまり思想や芸術といった精神文化やいわゆるハイカルチャーに限らず、政治、経済、科学、等々から習俗や日常生活をも含めた、人間の生のいとなみ全体を対象にする。したがってあらゆる専門領域の方々、あるいは非専門家に参加を呼びかける。

(2) 多様な文化を対象にする。さまざまな領域、さまざまな地方や国籍、さまざまな感受性や考え方をもつ人々の話をきいて、多様な文化の認識や相互理解を深めたい。

(3) 文化理論の再構築、あるいは新しい文化理論の展開をめざす。具体的な方向としては、西欧中心的、自国（あるいは国家）中心的な既成の文化理論に対して、国家の枠組みを越えた多元的共生をめざす文化理論をいかに構築しうるか、それも旧来のいわゆる文化相対主義の立場にとどまるのではなく、それをいかに越えるかを考える。

また旧来の比較文学や比較文化論がはじめから内蔵しているナショナリズムをいかに越えるか、が重要な問題になるだろう。

(4) 研究会の運営にかんしては、メンバーは、国籍や所属集団、学内外を問わず、教員、職員、学生、卒業生、社会人、あるいは通りすがりの人であっても関心があれば自由に参加し、発言もできるような、可能な限り開かれた自由な会をめざす。

この会の基本原則を一言で表わせば、「あらゆる意味で開かれた集まり」ということになるだろう。こうして、立命館における研究会としてはかなり異色なこの会は、1991年6月1日の第一回研究会に参加した31人を創立メンバーとして発足した。入会も退会も自由、共感と関心によって、あるいは楽しみによって（大事なことだと思う）その場集って来た人々が会員である。毎回、会の後にはささやかなパーティーがあり歓談の時間が設けられているが、これも出席するか否かは全く自由になっている。もっともそうした理想主義をかかげられるのも、実際には多くの人々や組織のお世話になっているからで、会場の設定や通知、会報の作製なども含めて国際言語文化研究所の野村芙美子、高木宏之、倉貫豊の諸氏にたいへんな労力をおかけしている。また第一回の研究会で、会の責任者を竹内実先生に、事務局を松宮秀治、中野雅博、小木裕文の三氏にお願いすることになって現在に至っている。

こういうタイプの研究会なので、頻繁に開くことはできないが、そのかわり年に2、3回充実したものにしていうことになった。さいわい、これまでに6回の研究会を開くことができた。報告者は毎回3名くらいにお願いして、付記のリストを見ていただければわかるように、さまざまな領域のさまざまな立場からの興味深い報告—討論が続いている。参加者も、本学や京都の他の大学の他に、大阪や名古屋などからもかなり多勢の方に来ていただけて、毎回、30人前後の盛況である。会報も、毎回の報告要旨の他に小論文やエッセーを載せたものが、すでに5号となった。また参加者の全員に執筆をお願いした『比較文化キーワード』（仮題）の出版計画も進んでいて、すでに予定された50項目中45項目の原稿（各15枚）が出て編集が行われている。中心も方向性もあまり明確でなく、これまでは自然の勢いでうまく行ったとしても、今後どのようなものになってゆくか、反省すべき点も多いことは言うまでもないが、このような会が存在しえたことだけでも興味深いことではないだろうか。本号の比較文化研究会特集号は、研究会のこのような段階で組まれたものであり、また研究会の性格上、特別の編集も行われておらず、研究会のあるがままの姿を映しだすことになっている。研究会のこれからの方向にたいする御意見も含めて、率直な御批判がいただければ幸いである。また本号を読まれてこの会に関心をもたれる方があれば、ど

うか自由に参加していただきたい。「あらゆる意味で開かれた集まり」をめざしている会なのだから。連絡は立命館大学国際言語文化研究所事務室まで。

付記、これまでに開かれた研究会の報告者と論題は以下のとおり。

第1回 (1991年6月1日)

竹内 実「中国文化の深層」

小木 裕文 「マレーシア華人社会の教育問題」

吉川 寛「自己の境界 ―英語と日本語の主語をめぐる―」

松宮秀治「国学から国文学へ ―芳賀矢一の場合―」

第2回 (1991年10月19日)

岩田 慶治「文化のなかの知と文化を映す鏡」

山田 伸明「母のイメージ」

ウエイ＝ベン チャン「台湾における近代化の過程にかんするいくつかの考察」

題3回 (1992年4月25日)

ひろた まさき、中野雅博「西川長夫著『国境の越え方』をめぐる」

佐藤 方代「名古屋の輸出陶磁器とヨーロッパ」

第4回 (1992年7月18日)

グードルン グレーヴェ「18世紀の日本とドイツの社会観

―山県大弼とフォン・クニッゲの社会観について―」

ジャックリーヌ ベルント「近代文化における他者」

第5回 (1992年10月31日)

竹内 実「メンツ」

川久保 輝興「あべこべ」

水野 豊「壁」

第6回 (1992年11月28日)

古田 博司「朝鮮における儒教土俗の世界」

イザベル シャリエ「日本とフランスの近代絵画」

児玉 徳美「言語相対論について」